

[論説] 1361年康安南海地震で法隆寺五重塔の九輪の上は本当に燃えたのか？

石橋 克彦*

Did the Top of the Five-Storied Pagoda in the Horyuji Temple Really Burn due to the 1361 Ko-an Nankai Earthquake?

Katsuhiko ISHIBASHI

2-28-26 Yokowo, Suma-ku, Kobe, 654-0131 Japan

Several popular and academic books on Japanese historical earthquakes written by earthquake specialists say that the top of the five-storied pagoda in the Horyuji Temple caught fire due to the 1361 great Ko-an Nankai earthquake. This interpretation probably comes from the description of *Kagen-ki*, a valuable historical material on the Horyuji Temple in the 14th century, contained in the first volume of *Zotei Dai-nihon Jishin Shiryo* (collection of faithful type reproductions of historical documents on earthquakes in Japan; *Musha Shiryo* for short) published in 1941. It is strange, however, that the fireless top of the pagoda got burned by the earthquake shaking. In general, an existing historical document has various versions, from the original handwriting to later transcriptions of multiple times. Concerning *Kagen-ki*, a book compiled in the 14th century and now preserved in the Tokyo National Museum (TNM), which is different from the source book of *Musha Shiryo*, is considered to be the most reliable version. According to the TNM book of *Kagen-ki*, whose facsimile edition is available, two Chinese characters “*ka sai*” in *Musha Shiryo*’s *Kagen-ki*, which means fire, are “*ka en*,” in truth, meaning a flame-shaped ornament on the top of the pagoda. Thus, it has been ascertained that the top of the five-storied pagoda in the Horyuji Temple did not catch fire due to the strong shaking of the 1361 Ko-an Nankai earthquake, but was just broken. This result is a good lesson that the best available versions of historical documents should be utilized in historical seismology.

Keywords: 1361 Ko-an Nankai Earthquake, Horyuji Temple, Five-Storied Pagoda, Fire, Historical Document.

§ 1. はじめに

南北朝時代の1361年7月26日4～5時頃(ユリウス暦;和暦では康安元年<南朝は正平十六年>六月二十四日,卯に近い寅刻),紀伊水道沖～四国沖を震源域とする南海トラフ巨大地震と推定される地震が発生した[例えば,宇佐美・他(2013),石橋(2014)].

なお,この地震は「正平地震」と呼ばれることが多いが,その呼称は,南朝を正統とする戦前の皇国史観のもとでの歴史地震研究の遺産といえる.この地震に関するほとんどの史料は北朝年号で書かれているから,現在の日本史学の習慣に従って「康安」を用いたほうがよい[石橋(2002,2014)].

さらに付言すると,日本史学の保立道久氏が,「そもそも,歴史事件の呼称に元号を使うことは余計な記憶を強制し,また事柄を曖昧にするもので,歴史学の学術用語は,元号の使用をさげ,事件の本質を表現することができる限り即物的な用語法を工夫しなければならない」として,過去の地震の略称に元号を冠するのは適当ではないと主張している[保立(2012)].これは文理融合が重要な歴史地震学において,傾聴すべき

意見である.しかし地震研究者は,「大正関東地震,元禄関東地震」など,単に時期を表わす「即物的な」符牒として元号を冠してきたのではないかと思われる(西暦+元号でさらに特定性や確実性が増す).そのような観点から,当面は「1361年康安南海地震」という呼称を用いる.

さて,本地震により京都で魂を消すような揺れを感じ,大坂四天王寺で金堂が倒壊し,奈良方面では唐招提寺・薬師寺・法隆寺で回廊の転倒や堂塔の損傷が生じた.熊野では本地震と2日前の地震によって三山の建物・岩屋などに大被害があった.由岐(徳島県),大坂,高知県南国市には大津波が押し寄せた.

この地震の被害の一つとして,一般向けの歴史地震の書籍や学術書の幾つかが[例えば,寒川(2011,2013),山本・萩原(1995),矢田(2009)],法隆寺の塔の九輪の上で火災が生じたとしている.例えば寒川(2011)は,「法隆寺では御塔の九輪の上が燃え落ち,金堂の東の間の仏壇の下が燃えて崩れ落ちた」と書いている.

本地震では,四天王寺の大塔が傾いて九輪が落ち

* 〒654-0131 神戸市須磨区横尾 2-28-26
電子メール: ishi@kobe-u.ac.jp

たり、薬師寺の塔の1基で九輪が落ちて1基は大いにゆがんだり、唐招提寺の塔の九輪が大破損したりと、背の高い塔の頂部の損傷が目立つが、火気のない塔の上部で地震動により火災が発生するというのは不思議なことである。

実は、火災という認識は、誤った地震記事にもとづく誤解であることを石橋(2014)の本文(71頁)および注記で略述したが、本稿で詳細に論じたい。

§2. 「火災」と記す地震史料と法隆寺五重塔

法隆寺の塔の上部が火災という見解は、『増訂大日本地震史料・第一巻』[武者(1941);以下、武者史料と略記]所収の『斑鳩嘉元記』の

同月廿四日卯時、大地震在之、當寺ニハ御塔九輪之上火災、一折燃テ下モヘハワチス、金堂東ノ間佛壇下モヘクツレヲツ

に拠ると思われる。

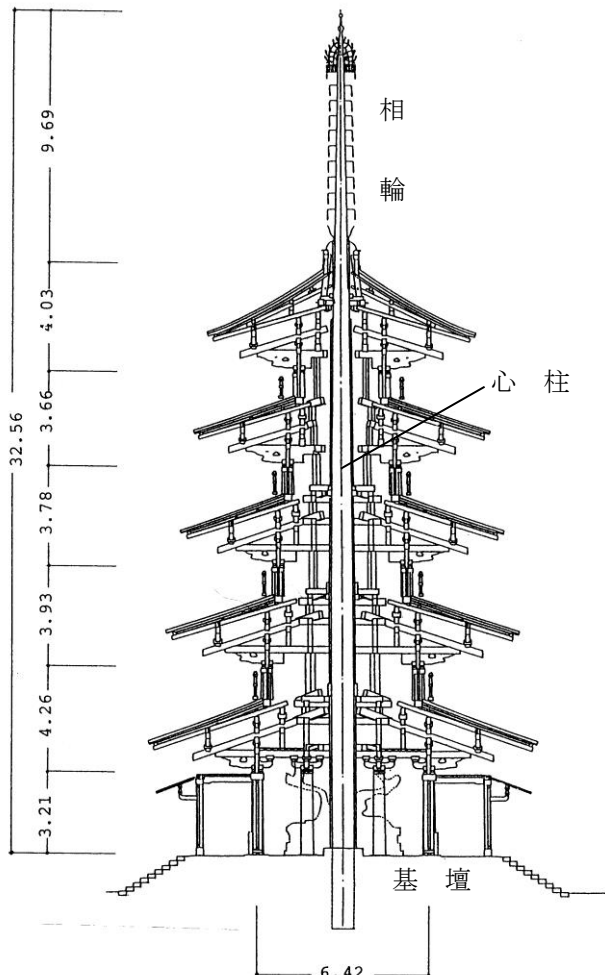


図1 法隆寺五重塔の断面図[川口・阿部(1996)の図4aに部位名を加筆].

Fig. 1. Vertical cross section of the five-storied pagoda in the Horyuji Temple. Parts names are added to Fig. 4a in Kawaguchi and Abe (1996).

石橋(2005)が指摘したように、武者史料は、明治政府が開始して現在も東京大学史料編纂所が刊行を続けている『大日本史料』をそっくり取り入れた部分が少なくないようだが、本地震もその一例かもしれず、『大日本史料』(第六編之二十三, 1927年刊)が同じ記述を含む『斑鳩嘉元記』を掲げ、しかも「塔九輪ノ上火災」と頭注を付している。

法隆寺で「御塔」といえば五重塔以外にはない。それは7世紀に着工された世界最古の木造の大塔で(着工年・完工年ともに不詳)、国宝に指定されている。全高は約33mである。断面図を図1に示す。

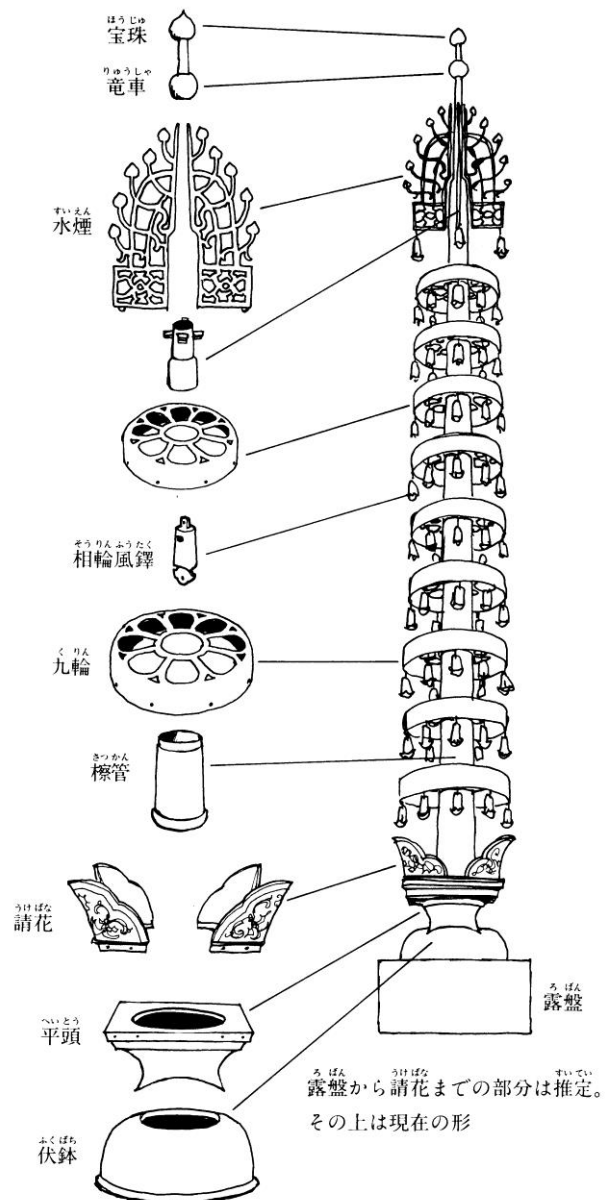


図2 法隆寺五重塔の相輪の図解[西岡・他(1980)のp.73の図の一部を引用].

Fig. 2. Illustration of the Sorin, the finial, of the five-storied pagoda in the Horyuji Temple (after Nishioka et al. (1980)).

一般に、五重塔の五重屋根より上の部分は「相輪」と呼ばれる(図1)。それは、塔の中心を鉛直に貫く「心柱」(図1)の頂部に青銅製ないし鉄製のキャップを被せたような構造をしており、図2のように、下から、露盤・伏鉢・請花(受花ともいう;平頭を含む)・九輪(擦管を含む)・水煙・竜車(流星、立星ともいう)・宝珠からなっていて、九輪と水煙に風鐸を釣る。相輪はインドのストーパー(仏塔)を模したもので、仏舎利の象徴であり、五重以下の建物は相輪を載せる台が発達したものといえる[例えば、吉川弘文館『国史大辞典』の「相輪」;川口・阿部(1996)]。

法隆寺の場合、心柱の礎石(心礎)が基壇(図1)の下の地面の中に据えられており、それを穿った窪みに舍利容器が納められていて、その上に心柱が立っている。相輪は青銅製で(露盤は当初は凝灰岩製だったらしい)、各パーツごとに順に心柱に被せていったと推測されている。西岡・他(1980)は、五重屋根の上に高い足場を組んで、擦管や九輪を一つずつ心柱に被せて落とし込んでいく作業の想像図を興味深く描いている(p.71, イラストは穂積和夫氏)。

相輪の高さは約9.7mだが、古代・中世・近世に何度か修理がなされたので、1361年当時は多少違っていたかもしれない[法隆寺國寶保存工事事務所長(1955)]。

地震による火災が本当だった場合、揺れによる摩擦か火花で発火したとでもいうのだろうか? 地震時にたまたま落雷があったという可能性もありうるが、同時代史料の『後深心院関白記』『忠光卿記』によれば地震の前日および当日の天気は「小雨」ないし「晴」とのことで、時間が早朝ということもあり、雷火の可能性は低そうである。いずれにせよ、この現象を究明するためには、まず史料を再確認する必要がある。

§3. 『嘉元記』の記述

武者史料と大日本史料が収載している『斑鳩嘉元記』は、『嘉元記』の別書名である。荻野(1983)によれば、『嘉元記』は、鎌倉時代末期～南北朝動乱期の嘉元三年(1305)～貞治三年(1364)の60年間の法隆寺と周辺の動静を、法隆寺の寺僧らが年代順に書き継いだ貴重な記録である。それを南北朝時代に一冊に書写した袋綴本が、法隆寺献納本として東京国立博物館に蔵されているという。

その複製本が『鶴叢刊』第三として刊行されているので[荻野仲三郎(1936)]、それを閲覧した。その結果、武者史料と大日本史料の「火災」という表記などが誤りであることが判明した。なお東京国立博物館蔵本は本文第1丁表の画像のみが同館ウェブサイトで公開されている (<http://webarchives.tnm.jp/imgsearch/show/C0045172>; [調査・研究]の画像検索ページ)。

法隆寺献納本『嘉元記』は、墨付84丁(ただし、目次と本文の間の第7丁表裏と最後の第84丁裏は白

紙)の袋綴で、「右者、元禄九丙子年正月、在京之中、加修補處也、寔當寺之重寶、可秘藏者也、西園院権少僧都良尊」と記す1丁が付いている。鶴叢刊本は、これらすべてをコロタイプ印刷で複製し、表裏の表紙を付けて和装本としたものである。

荻野三七彦(1936)によれば、冒頭6丁の内容目次と本文中の朱書との対応や、筆跡(全巻が一筆)の古さから、本書が、康安二年(九月に改元されて貞治元年;1362)の頃に編纂された原本と推定される。

問題の記事は第77丁表にある。それを、その前の第76丁裏の関連記事(後述)とともに図3左に示す。この図から明らかなように、

同月廿四日卯時大地震在之當寺ニハ御塔
九輪之上火炎一折懸ニテ下モヘハヲチス
金堂東間ノ佛壇下モヘクツレヲソ
(下線部[引用者による]は不確実)

であって、武者史料と大日本史料の「火災」は「火炎」、「一折燃」は「一折懸」が正しい。東京国立博物館には江戸期影写本『嘉元記』も所蔵されているが(図3右)、それも同様である。実は、『改定史籍集覧』第二十四冊(近藤出版部、1902年刊)も「御塔九輪之上火炎一折懸テ下モヘハヲチス」と翻刻している。

また鶴叢刊本『嘉元記』には、地震記事の前に別条として、

康安元年辛丑六月廿八日禅覺房御塔之火
焰大地震ニ今月廿四日損シタルヲ一人登
テ一人シテ被直タル恩賞ニ中藺ニ被成畢
今日三輩治定 (<>は傍注、下線は引用者)

という記事がある(武者史料と大日本史料では、同じ記述が地震記事のあとに出ている)。

以上より、『嘉元記』の原文により近いのは(つまり事実により近いのは)「塔の九輪の上の火炎(火焰; たぶん水煙)一つ(片側)が折れ懸かったが下(しも)へは落ちなかった」ということだろう。そうであれば禅覺房の話とも符合する(相輪の最上部まで登ったというのは驚きだが、前述の西岡・他(1980)p.71の画を見ると、身軽な者ならば足場がなくても登れそうに思える)。なお、鶴叢刊本の「懸」の判読は高橋昌明・馬田綾子両氏のご教示を得、「下モヘハ」の「モ」が送り仮名類似のもので「下(した)もへは」でなく「下モ(しも)へは」と読むのであろうことは高橋昌明氏のご教示を得た。

寒川(2011)は、「金堂の東の間」についても「仏壇の下が燃えて崩れ落ちた」と書いているが、これも「仏壇が、しも(下モ)へ崩れ落ちた」であって、火災ではないだろう。

§4. 康安元年七月十一日の地震被害

『嘉元記』は、康安元年六月廿二日・廿四日の一つ書(「一何々」と書き記すこと)の地震記事の最後に、次のように記す(鶴叢刊本による)。

同年辛丑七月十一日大地震在之當寺御塔

立法立星本ヨリ折レテ落畢

其後爲寺門之沙汰或ハ寺僧郷民勸進或ハ
八年貢供料借置廻種々之秘計同年十二月晦
日造功如元成畢其内別當御房懷雅御奉加

五貫文在之

これによれば、法隆寺は康安元年七月十一日に再び
強い地震動に襲われ、五重塔の水煙の上の立法(宝
珠か? 保立道久(私信)は、宝珠を「龍宝」と言った

康安元年六月廿八日禪賞房水煙之火塔大地震損シタリ
 一人死シテ一人シテ被直名息貞中筋被成并今日三車治定
 一康安元年六月廿二日卯時地震五ノ南寺東院南大門西脇
 染地半本ノ日院中門小脇染地二本西寺南大門西脇染地半本
 同日廿二日卯時大地震五ノ南寺東院南大門西脇染地半本
 全堂東向佛壇下五ノ東大門小脇染地少破落

康安元年六月廿八日禪賞房水煙之火塔大地震損シタリ
 一人死シテ一人シテ被直名息貞中筋被成并今日三車治定
 一康安元年六月廿二日卯時地震五ノ南寺東院南大門西脇
 染地半本ノ日院中門小脇染地二本西寺南大門西脇染地半本
 同日廿二日卯時大地震五ノ南寺東院南大門西脇染地半本
 全堂東向佛壇下五ノ東大門小脇染地少破落

図3 左、『嘉元記』における康安元年六月二十四日の法隆寺五重塔地震被害の記述[荻野仲三郎(1936)『鵜
 叢刊第三嘉元記』の第76丁裏および第77丁表(部分)]; 右、東京国立博物館所蔵の江戸期影写本『嘉元
 記』の対応箇所(画像利用条件: [作家名]なし, [作品名]嘉元記 本文(部分), [所蔵先名]東京国立博物
 館(画像番号E0020131), [クレジット表記] Image: TNM Image Archives)

Fig. 3. Kagen-ki's description of the 1361 July 26 earthquake damage of the five-storied pagoda in the Horyuji
 Temple. Left, The 14th century's edition after Ogino (1936); Right, Edo-period transcription preserved in the
 Tokyo National Museum.

のかみしれず、その当て字が「立法」ではないかと推測している)と立星(前述のように竜車)が根元から折れて落ちてしまった。その後、苦勞して費用を工面し、同年の大晦日に修復が完了した。

七月十一日の地震については他に史料がなく、塔の被害が六月二十四日と混同されているかとも疑われるが、明瞭に書き分けられていると判断される。一般に南海トラフ巨大地震によって活発化する内陸の地震活動[例えば、石橋(2014)]の一環として、法隆寺の近くで浅い中小地震が発生したのかもしれない。当然、六月二十二日と二十四日の強震動によって相輪が全般的に弱くなっていたこともあるだろう。

§5. おわりに

結論として、康安元年六月二十四日の南海巨大地震によって、法隆寺五重塔の九輪の上が燃えたわけではなく、水煙の片側が折損したが引っ懸かって下へは落ちなかった、というのが事実だと判断される。それに加えて七月十一日の強震動で水煙の上の竜車と宝珠が落下した。

実は、奈良六大寺大観刊行会(1972)が、巻末に「史料四」として鶴叢刊本『嘉元記』(抄)の翻刻を掲載し、本文に「康安元年(一三六一)の地震で相輪が破損したのを修理し(『嘉元記』史料四)」と記している。法隆寺國寶保存工事事務所長(1955)も、「御塔九輪之上火災一折懸テ下モハヲチス」を含む『嘉元記』の記事を巻末に載せ、本文中で、『嘉元記』が「塔の水煙が折損したことを記している」としている。そして、水煙が転落した形跡はないようだとして述べている。

つまり、両書とも火災が生じたとはしていないわけだが、史料地震学としては、それを信ずればよいというわけにはいかないから、本稿の検討が無意味だとはいえないだろう。ただし、疑問を抱いた筆者を含めて、歴史地震学が「井の中の蛙」的であった感は否めない。そして本件は、地震史料の原本(ないし、それに一番近いもの)に極力遡るべきことの重要性を、あらためて教えている。

なお、興味深いのは、一般に、九輪の上の火炎状の装飾を「水煙」と呼ぶのは「形が火に似ているのを忌み、同時に火を調伏する縁起から」(例えば小学館『日本国語大辞典』の「すいえん」と説明されているが、少なくとも今の場合(中世の法隆寺)、僧侶自身が平気で「火炎(火焰)」と呼んでいたことである。

謝辞

本文中に記した点でご教示を頂いた高橋昌明・馬田綾子の両氏、『嘉元記』江戸期影写本の画像を使わせてくださった東京国立博物館、それを含めて種々ご教示くださった田良島哲氏、コメントを頂いた保立道久氏・匿名査読者・編集担当西山昭仁氏、以上の方々に厚く御礼申し上げます。

対象地震：1361年康安南海地震

文 献

- 法隆寺國寶保存工事事務所長(編), 1955, 法隆寺國寶保存工事報告書 第十三冊 國寶法隆寺五重塔修理工事報告, 法隆寺國寶保存委員会, 320 pp.
- 保立道久, 2012, 平安時代末期の地震と龍神信仰—『方丈記』の地震記事を切り口に—, 歴史評論, 750号(2012年10月号), 66-80.
- 石橋克彦, 2002, フィリピン海スラブ沈み込みの境界条件としての東海・南海巨大地震—史料地震学による概要—, 京都大学防災研究所研究集会 13K-7報告書, 1-9, <http://historical.seismology.jp/ishibashi/archive/2002DPRI.pdf>
- 石橋克彦, 2005, 日本の古代・中世の地震史料の校訂とデータベース化, 月刊地球, 27, 811-818.
- 石橋克彦, 2014, 南海トラフ巨大地震—歴史・科学・社会, 岩波書店, 262 pp.
- 川口衛・阿部優, 1996, 木造古塔の心意気, 上田篤(編著)「五重塔はなぜ倒れないか」, 新潮選書, 201-236.
- 武者金吉(編), 1941, 増訂大日本地震史料, 第1巻, 文部省震災予防評議会, 960 pp.(復刻 日本地震史料, 第1巻, 2012, 明石書店)
- 奈良六大寺大観刊行会(編), 1972, 奈良六大寺大観 第一巻 法隆寺一, 岩波書店.
- 西岡常一・宮上茂隆・穂積和夫, 1980, 日本人はどのように建造物をつくってきたか 1 法隆寺—世界最古の木造建築, 草思社, 95 pp.
- 荻野仲三郎(編, 発行), 1936, 鶴叢刊第三嘉元記.
- 荻野三七彦, 1936, 嘉元記解題, 荻野仲三郎(編)「鶴叢刊第三嘉元記」, 別冊, 7 pp.
- 荻野三七彦, 1983, 嘉元記, 「国史大辞典」, 吉川弘文館, 第3巻, 224.
- 寒川旭, 2011, 地震の日本史—大地は何を語るのか—増補版, 中公新書, 286 pp.
- 寒川旭, 2013, 歴史から探る21世紀の巨大地震—揺さぶられる日本列島, 朝日新書, 284 pp.
- 宇佐美龍夫・石井寿・今村隆正・武村雅之・松浦律子, 2013, 日本被害地震総覧 599-2012, 東京大学出版会, 722 pp.
- 山本武夫・萩原尊禮, 1995, 正平十六年(康安元年, 一三六一)六月二十四日前後の地震—南海大地震, 震害と津波被害の検討, 萩原尊禮(編著)「古地震探究—海洋地震へのアプローチ」, 東京大学出版会, 70-96.
- 矢田俊文, 2009, 一三六一年の地震被害, 「中世の巨大地震」, 吉川弘文館, 51-76.